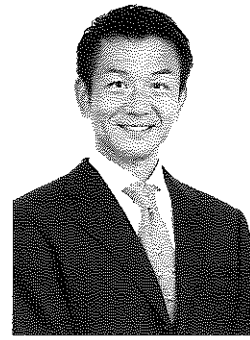


年頭の二揆揆

衆議院議員

小田原 潔



明けましておめでとうございます。

森理事長はじめ借行社の先輩方には令和5年が素晴らしい年になります様お祈り申し上げます。旧年中最大の驚きはロシアによるウクライナ侵略でした。続々と国境に集まる戦車や軍用トラックを衛星写真で長期間確認しておきながら、西側諸国の危機意識と支援は不十分でした。クリミア併合時に武力で抵抗しなかった記憶と、反撃する意志も能力もないと見られた事が実力行使を許してしまった一因でありましょう。我が国には大きな教訓です。

思えばベルリンの壁崩壊を見た時我々は「遂に世界中で民主主義と平和が浸透する」と信じて疑いませんでした。30年を経て甘すぎた思い込みだったと思ひ知らされました。国際社会に

は(1)警察がおらず、(2)他国の意志を本当に予知することは不可能であり、(3)だからこそ自国は最悪の事態を想定し備えねばならないという事でしょう。今ようやく宇宙に軍事支援が提供され、岩田清文閣下の各所での発信によると露国は侵略作戦に投入した人員の約半分が死亡または負傷により戦闘不能、作戦継続は相当な困難を伴うとの事です。頑固な独裁者が主導している以上、いつ、どういう条件で戦争が終わるのか未だ見通せませんが、これが「本当の終わりの始まり」になる事を期待します。

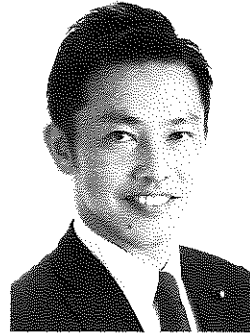
一方我が国と価値を共有している近隣地域に同様の事態が起こった場合に備え防衛力の抜本的強化に入ります。が、予算増だけでなく自衛隊に期待される事が出来るように法の整備、民間や同盟国との連携の範囲など、定めるべき事が山積しています。この機を他山の石として正當に活かし力を合わせて整備して参ります。

尚、昨年11月、台湾の防衛研究者一行が来日され懇談した際、「日本は台湾有事が起こった場合の自国民避難を議論しているが、我々の防衛力を信用せず逃げるのか？間違ったメッセージを発信することになる」と言われた事を申し添えます。

年頭揆揆

衆議院議員

中谷 真一



年頭にあたり一言、ご挨拶申し上げます。

まずは、昨年8月12日に経済産業副大臣を拝命致しました。これは「同じ釜の飯を食った」と最初から熱心に応援して頂いた借行社を始めとする、自衛官、自衛官OBの皆様のおかげであり、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。

さて、昨年は世界の秩序が大きく変わった一年となりました。

ロシアのウクライナ侵略により、「力による一方的な現状変更」が常態化する可能性があります。今はヨーロッパで起きていますが、これは世界中に波及する。それは我が国周辺の東アジアでも例外ではありません。いまでもなく、我々の見ている最大の脅威は中国です。米中の覇権争いが激化しています。私の所管する経済分野についても顕著です。これはさらにエスカレーター、特に軍事面において激しさを増

していきます。中国が台湾統一に強い熱意を示しています。これは台湾自体を手中にすることが目的ではなく、米中争いとすると、その戦場は東アジア、太平洋とせざるを得ず、それは77年前、日本と米中が戦った時と同じです。そうするとどうしても中国は太平洋方向に出なければならぬのが台湾、日本列島です。よって台湾を取らなければ米中争いの勝負にならないのです。仮に台湾が赤く染まれば日本周辺の海は中国の海となるので安全保障は極めて厳しい状況になります。まず台湾を失ってはいけません。米中と協力し、その後、国連において台湾を一つの国として承認すべく行動すべきです。中国と台湾は一国だということになっているので、何を言っても内政干渉といふことで片付けられてしまうこの状況を打破しなければなりません。

さらに自国の防衛力を急速に高めなければなりません。そのために予算をここ2、3年でGDP比、2%の10兆円を超える額にしなければなりません。これは積み上げ論ではなく、政治的意志として10兆円という枠を決めなければなりません。増税とセットで議論していますがこれはナンセンスです。何故ならば財政健全化と安全保障のどちらを優先するかといえば安全保障を優先します。これが崩れるです。また、財政健全化など無いのですから。安全保障の現場を経験した政治家としてこの議論をリードすべく力を尽くします。引き続きのご指導ご支援を宜しくお願い致します。